

スピリチュアリズムによる靈性進化の道しるべ

「シルバーバーチの靈訓」

(203)

一章 死ぬことは悲劇ではありません

人間は、この世にあっていつかは「死」の現実に直面せざるを得ない。それは、愛する人であるかも知れないし、親友であるかも知れない。近所の人であるかも知れないし、同僚や知人であるかも知れない。

中には、気の毒にもそれが身も心も打ち砕くほどの悲劇的体験となる人もいる。そしてその悲しみの淵から抜け出るのに何か月も、時には何年も、掛かることがある。

その観点からすると、人間が例外なく「死」を超えて生き続けるという事実について確固たる証拠に基づく信仰と内的確信をもつスピリチュアリストは、何と恵まれていることであろう。

シルバーバーチは語る――

「死ぬことは悲劇ではありません。今日のような地上世界に生き続けねばならないことこそ悲劇です。利己主義と貪欲と強欲の雑草で足の踏み場もなくなっている大靈（神）の庭に生き続けることこそ悲劇といふべきです。

「死ぬ」ということは物的身体のオリの中に閉じ込められていた靈（真の自我）が自由を獲得することです。苦しみから解放され真の自我に目覚めることが悲劇でしょうか。豪華けんらんの色彩の世界を目のあたりにし、地上のいかなる楽器によっても出す

ことのできない妙なる音楽を聴くことが悲劇なのでしょうか。

地上で存分な創造活動ができなかった天才が、その潜在する才能を発揮する機会を得るのが悲劇なのでしょうか。利己主義もなく貪欲もない世界、魂の成長を妨げる金銭欲もない世界に生きていることが悲劇でしょうか。あなたはそれを悲劇と呼ぶのでしょうか。一切の苦痛から解放された身体に宿り、一瞬の間に地上世界をひとめぐりでき、しかも靈的生活の醍醐味を味わえるようになることを、あなたは悲劇と呼びになるのですか」

ある日の交霊会でシルバーバーチは、その日の出席者に睡眠中のことに言及して、人間は地上にいる時からしばしば靈界を訪れている話をして――

「そうでないと、いよいよこちらへ来て本当の意味での「生きる活動」を開始すべき靈にとつて、靈界の環境がショックを与えることになりかねないのです」

「では、私たちが死んでそちらへ行くと、地上で睡眠中に訪れた時の体験をみな思い出すのでしょうか」

「もちろんです。なぜかと言えば、その時点でああなたは肉体の制約から解放されて、睡眠中にほぐされていた靈的意識を発揮できるようになっていくからです。その新たな自我の表現活動の中で睡眠中の全記憶、睡眠中の全体験の記憶が甦ってきます」

では、死後下層界へ赴かざるを得なくなった靈の場合はどうな

るか、という質問が出された。つまり、そういう人もやはり地上時代の睡眠中の体験——たぶんやはり下層界での体験——を思い出し、それが下層界へ行ってからの反省にプラスになるのかという問いである。シルバーバーチが答える。

「死後下層界へ引かれていく人は睡眠中の訪問先もやはり下層界ですが、そこでの体験は死後の身の上の反省材料とはなりません。なぜなら、死後に置かれる環境はあい変わらず物質界とよく似ているからです。死後の世界は下層界ほど地上とよく似ております。波長が同じように物的だからです。高い界層になるほど波長が精妙になってまいります」

「地上にいる間でも睡眠中の体験を思い出すものでしょうか」
——時おりおぼろげながらそれらしきものを思い出すという列席者が尋ねた。

「あなたの霊がその身体から離れると、脳という地上生活のための意識の中枢から解放されます。するとあなたの意識はこちらの世界の波長——といっても進化の程度による個人差があります——での体験をするようになり、体験している間はそれを意識しております。

が、朝その身体にもどり、その霊的体験を思い出そうとしても、思い出せません。なぜかと言えば、霊による意識の方が脳による意識より大きいからです。小は大を収容することができず、そこに歪みが生じるのです。それは例えば小さな袋にたくさん物をぎゅうぎゅう詰めにするようなものです。ある程度までは入って

も、それ以上のものを無理して入れようとする形が歪んでしまいます。それと同じことが肉体にもどった時に生じているのです。しかし、魂が進化してある一定以上のレベルの霊的意識が芽生えた人は、霊界での体験を意識できます。そうなると脳にもそれを意識するように訓練することができます。

実はわたしはここにおいでの方皆さん全員に霊界でお会いしており、地上にもどったらのことを思い出してくださいよ、とお願ひしているのですが、どうも思い出していただけないようです。お一人お一人と語り合い、またいろんな場所へご案内してあげているのですよ。ですが、たとえ今は思い出せなくても、何一つ無駄にはなりません」

「その体験の記憶が死後に役立つということでしょうか」
「その通りです。何一つ無駄にはなりません。摂理はうまくできています。霊界へ来て永い永い体験を積んだわたしたちは、摂理の完ぺきさにただただ感嘆するばかりなのです。地上でのホンのわずかな体験で宇宙の大霊にケチをつける人間を見ると、情けなくなりませう。知らない人間ほど自分を顕示したがるものです」

続いて出された質問は、そうした睡眠中の体験はただ単に死後への準備なのか、それとも為すべき仕事があってそれに従事しに行く人もいるのか、というものだった。
シルバーバーチが答える——

「仕事をしに来る人もいます。睡眠状態において背後霊団の仕事にとつて役立つ人がいるのです。(たとえば暗黒界へ降りて幽体で霊媒の役をすることがある)しかし、ふつうは死後への準備です。物質界での生活のあとから始まる仕事にとつて役に立つような勉強をするために、あちらこちらへ連れて行かれていくのです。そうしておかないと、いきなり次元の異なる生活形態の場へ来た時のショックが大きくて、その回復に相当な時間を要することになります。

そういうわけで、あらかじめ霊的知識をたずさえておけば、死後への適応がラクにできるのです。何も知らない人は適応力がつくまでに長期間の睡眠と休息が必要となります。知識があればずんなりと霊界入りして、しかも意識がしっかりとしています。要するに死後の目覚めは暗い部屋から太陽のさんと照る戸外へ出た時と似ていると思えばよろしい。光のまぶしさに慣れる必要があるわけです。

霊的なことを何も知らない人は死という過渡的現象の期間が長びいて、なかなか意識がもどりません。さしずめ地上の赤ん坊のような状態です。ハイハイしながらの行動しかできません。睡眠中に訪れた時の記憶は一応思い出しますが、それがちょうど夢を思い出すのと同じように、おぼろげなのです。

良い心がけが無駄に終わることは、地上においてもこちらの世界においても、絶対にありません。そのことを常に念頭に置いておいてください。真心から出た思念、行為、人のためという願いは、いつか、どこかで、だれかの役に立ちます。そうした願いのあるところには必ず霊界から援助の手が差し向けられるからです。

地上は今やまったくの暗闇におおわれています。迷信と間違

と無知のモヤが立ちこめております。大霊の意志が届けられる道具はごくわずかしきません。予言者の声は荒野に呼ばわる声のごとく、だれも聞いてくれる人がいません。洞察力に富む彼らの開かれた未来像はかき消され、聖なる道具(霊媒)は追い出され、聖職者の悪知恵と既得の権力が生ける神の声と取って代わってしまいました。

物質万能主義がその高慢な頭をもたげ、霊的真理をことごとく否定しました。その説くところは実に意気軒昂(けんぱう)でしたが、それがもたらした結果は無益な流血・悲劇・怨恨・倦怠・心の病・絶望・惨めさ・混沌・混乱を伴った世界規模の大惨事でありませんでした。

しかし、大霊の声をいつまでも押し黙らせておくことはできません。霊的真理が今ふたたび宣戦を布告しました。その目的とするところは狂える世界に正気を取りもどさせることです」

「そうでしょうとも。ですが、魂の奥底から湧き出る満足感を覚えるようになります。そして、見せかけだけで何の益もないものに捉われないようになります。無駄に使用されているエネルギー、目の前にありながらみすみす失われているチャンスをもったいなく思うようになります。そして自分は今どうすべきかが分かるようになります。

この交霊会もあなたにとつては初めての体験ですから不思議に思えることでしょう。ですが、これも宇宙の自然法則の一つを利用して行われているのです。地上の科学者は大自然の法則のすべてを発見したわけではありません。これまでに得た知識は全体のホンのひとかけらほどにすぎません。今後の開発を待ちうけてい

る法則と知識の分野がまだまだ広がっております。

それは必ずしも実験室内で発見されるとはかぎりません。解剖して見つかるとはかぎりません。計器で測れるとはかぎりません。進化した魂のみが理解できるもの、さらに高度な叡智を受け入れる靈的準備が整った者でないと理解できないものもあります。

知識は本来人間を尊大にするものではなく謙虚にするものです。知れば知るほどまだまだその先に知るべきものがあることを自覚させるからです。尊大にさせるのはむしろ無知の方です。知らないから生意気が言えるのです。最高の知識人はみな謙虚でした。知れば知るほど、知らないことが多いことを思い知らされるからです。

わたしたちへ向けて軽蔑と嘲笑の指をさす人たちは、頭の中に何も無い、無知で身を固めた人たちです。知識を求め、新しい真理をよるこんで受け入れる素直な魂には、靈の力が感動を及ぼすことができます。そういう素地ができていますからです。大靈の使徒として、その知識と叡智と力と意志とを地上にもたらすことに心を砕いているわたしたちにとっては、そういう人こそ役に立つ人材なのです。

わたしたち靈団の者は、自分自身のことは何一つ求めません。求めているのは、皆さんが物的な面だけでなく、精神と靈にかかわる面においても、心がけ一つで我がものとすることができる無限の恩沢おんたくに少しでも気づいてくれること、そのみです。測り知れない価値をもつ真理が皆さんを待ちうけているのです。

利己主義・無知・既得権力——これがわたしたちの前途に立ちただかる勢力です。そして、わたしたちはこれに真つ向から闘いを挑んでいるのです。徹底的に粉碎したいのです。魂を飢えさせ、

精神を飢えさせ、そして身体を飢えさせる元凶げんきょうであるこうした地上の悪の要素を取り除いて、その飢えを満たしてあげたいのです。

弱き者、墮落せる者の心を高揚し、寄るべなき人々に力を与えてあげたいのです。地上世界から飢餓と病気と不健康状態を取り除いてあげたいのです。地上の疫病であり人類の汚点である不潔なスラム街と汚れた住居を廃絶したいのです。

暗闇に閉ざされた人々に光を、何も知らずに生きている人々に靈的知識を授けてあげたいのです。人類の意識を高め、魂と精神と身体の足枷を解いてあげたいのです。あらゆる形での利己主義——文明を蝕みむしば、代わって混乱と破滅と戦争と破壊をもたらす地上の毒を取り除きたいのです。

言いかえれば、地上世界に靈力を甦らせ、お互いがお互いのために生き、お互いの幸せのために協力しあい、憎しみと貪欲と強欲と私利私欲が生み出す垣根を取り払い、大靈の意図された通りに平和と豊かさを満喫できるようにしてあげたいのです。

俗世的なものはいずれ消滅するのです。束の間のものは、しよせん束の間の存在でしかありません。しかし、靈的実在は永遠です。移ろいやすい物的所有物を絶対と思いついでいる人は、影を追いつめていようなものです。靈的真理を求めている人は、真に自分の所有物となるものを授かりつつある人です。自信をもって前進なさい。

生命の実体は物質の世界には見出せません。実在は靈的なのです。靈的真理を否定する者は生命力そのものを否定していることになり、自分を生かしてくれているその生命力の恩恵にあずかる

ことを拒否する者は、受難の人生を送ることになります。なぜなら大霊との連絡路を断つことばかりしているからです